「横槍」

—初稿—

2025/7/15

〈人物表〉

工藤 晴人

(22)

居酒屋でアルバイトする大学生

佐藤 雅史

(21)

晴人のバイト仲間で大学同期

飯田 杏菜

(21)

晴人のバイト仲間

石川 佑生

(35)

晴人のバイト先の店長

1. 歓楽街・路上（夜）

飯田杏菜（21）と工藤晴人（22）、並んで歩いている。駅に繋がる地下道の入り口に差し掛かって、

杏菜 「じゃ、私こっちだから」

晴人 「……うん」

杏菜 「……なんかした？」

晴人 「ううん、じゃあね」

杏菜 「うん。じゃあ」

二人、手を振って別れる。

晴人 「……」

2. 居酒屋・外観（夜）

個人経営の小さな大衆居酒屋。

3. 居酒屋・控え室（夜）

ごんまりとしたバックヤード。

扇風機が首を振っている。

晴人とバイト仲間の佐藤雅史（21）、座ってスマホを弄っていて、

雅史 「え？ 行ったんしょ、映画？」

晴人 「まあ、行ったけど」

雅史 「そうなんだ。俺てつきり……」

ドアが開く音。杏菜が控え室に入ってくる。

杏菜 「あ、おつー」

雅史・晴人「おつす」

杏菜、ハンガーラックからエプロンをパッと取って、急いで出ていく。

雅史 「まあ、じゃあ違うってことね」

4. 居酒屋・店内（夜）

杏菜、若い男性客のテーブルで注文を取っていて、

客1 「え、お姉さんのおすすめとかってある？」

杏菜 「……無いです」

客1 「じゃ逆に、この後暇だったりする？」

男性客たち、盛り上がる。

杏菜、顔色一つ変えない。客1、焦って、

客1 「逆に、逆に、こん中から一人選ぶとしたら……」

杏菜 「ご注文以上でよろしいですねー」

と、足早にテーブルを後にする。

客2 「ダセー、フラれてんじゃん」

客3 「逆にな」

杏菜、かき消すようにキッチンに向かって、

杏菜 「ポテサラー丁」

石川 「あいよー」

と、店長の石川佑生（35）。

晴人と雅史、その様子をキッチンから見ていて、

雅史 「夏っぽいよな。ああいうの」

晴人 「え？」

雅史 「ぽいことしてえわ」

5. 居酒屋・控え室（夜）

晴人、控え室に入っていくと、雅史と杏菜がなにやら談笑していて、

杏菜 「あ、おっー」

雅史 「おっす。じゃ、お疲れ」

と、二人に手を振って立ち去る。

晴人 「……？」

6. 帰りの電車内（夜）

晴人と杏菜、並んで座っていて、

晴人 「奥多摩？」

杏菜 「うん。なんか、BBQとかするらしい」

晴人 「ふーん」

杏菜 「え、工藤くんも誘われてんじやないの？」

晴人 「いや？」

電車が駅に止まり、ドアが開く。

晴人 「他に誰来るの？」

杏菜 「分かんない」

晴人 「……」

ドアの表示灯が点滅。ドアチャイムの音。

杏菜 「あ、これ急行だよ？」

ドアが閉まる。

晴人 「……いいや、次で降りる」

走り出す電車。

7. 大学・構内（昼）

晴人、構内を歩いていると、雅史が友人グループの
中で談笑している。晴人に気づいて手を振る。

× × ×

二人、並んで歩いていて、

雅史 「その日シフトなんだ？ もう予約しちゃったんだよな」

晴人 「他、誰誘ってたの？」

雅史 「今んとこ、藤倉さんと峯岸さんでしょ？」

晴人 「誰？」

雅史 「遅番の人たち。四年同士で付き合ってる」

晴人 「へえ」

雅史 「あと杏菜」

晴人 「だけ？」

雅史 「うん。店長にお願いしてみれば？」

晴人 「……風邪ひいても代わり探せて言われる」

雅史 「だよな。晴人パスかー。いや厳しいって」

晴人 「……」

8. 居酒屋・控え室（夜）

晴人 「あの、ちょっといいですか？」

石川 「ん？」

9. 奥多摩・マス釣り場（昼）

自然の川を堰き止めただけの野趣溢れる釣り堀。

石川、釣り竿にアタリ。急いで引き上げる。

糸を手繰り寄せると、マスが釣れている。

石川 「いやー、夏っばいねー」

と、自慢げに雅史に見せる。満面の笑み。
雅史、苦笑い。

雅史 「……わざわざ休みにするかよ」

晴人 「なんか、こうなっちゃった」

周囲にはマス釣りに興じている居酒屋スタッフが、
他にも十名弱。賑やかな大所帯になっている。

杏菜 「いいじゃん、賑やかで」

と、ひよっこり顔を出す。驚く二人。

杏菜 「思ってたより楽しいわ。(雅史に) ありがとね」

雅史 「おう」

杏菜 「え、峯岸さんてさ、めっちゃ面白くない？」

雅史 「それな。藤倉さんはもっとヤバイ」

杏菜 「マジ？」

10. 奥多摩・バーベキュー場(昼)

四人掛けのバーベキュー卓を三つ占領している一行。
杏菜と雅史、藤倉・峯岸カップルと同じ卓で、男女
二人ずつ向かい合う格好。串に刺された焼き魚を齧
りながら談笑している。

晴人、隣の卓でその様子を見ている。

晴人 「……」

石川 「晴人くん、食べな」

と、綺麗にほぐされた焼き魚を紙皿の上に盛り付け
て、晴人に渡す。

晴人 「……あざす」

石川 「(小声で) 俺さ、全然そういうの分かんないんだけどさ、
あいつらってできてんの？」

晴人 「え？」

石川 「ほら。絶対そうじゃない？ え、教えてよ」

と、杏菜たちの卓を顎で指して、

晴人 「(毅然と) いや、そういうのじゃないです」

石川 「お似合いじゃない？」

晴人 「そんなことないです」

石川 「えー、いっつも一緒に帰ってるけどな」

晴人 「そう、なんですか？」

石川 「こっそり帰り待ち合わせてんの。バレバレなのに」

晴人、談笑する杏菜と雅史を見ていて、

晴人 「……」

石川 「ほらほら、今、アーンってしなかった？」

晴人 「え？」

石川の指の先には、藤倉・峯岸。

石川 「……絶対そうだと思うんだけどな。ほら」

藤倉と峯岸、二人でどこかへ立ち去る。

雅史、空いた杏菜の隣に移る。

晴人 「……」

11. 奥多摩・喫茶店（昼）

木漏れ陽に照らされたログハウスの喫茶店のテラス。

杏菜、四人掛けテーブルに一人で座っている。

晴人、杏菜の向かいに座って、

杏菜 「あ、おつー」

晴人 「何それ？」

杏菜 「なんかハチミツのやつ？ 食べる？」

と、手に持ったアイスを差し出す。

晴人、自分のスプーンで一口掬って食べる。

晴人 「美味い」

杏菜 「ね。あのさ、デザート食べ終わったら雅史がロープウエ

ー乗ろって。行く？」

晴人 「いや、いい」

杏菜 「え、なんで？」

晴人 「……ロープウエー、今から乗らない？」

雅史、トレーに乗ったパフェや飲み物を持って登場。

後ろには藤倉と峯岸。

晴人がいるので、どこに座ろうかとまごつく。

杏菜、察して立ち上がり、

杏菜 「あ、椅子、一個持ってこようか？」

晴人 「いいって」

と、立ち上がる。

晴人 「(雅史たちに) いいよ、座って」
雅史 「は？」
晴人 「行こ」
杏菜 「……？」

(おわり)